
ぜんぶネタバレ

黒木露火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぜんぶネタバレ

【Nコード】

N6455M

【作者名】

黒木露火

【あらすじ】

改稿にあたつての試行錯誤の過程を晒してみます。
自作語り乙！と思ってください。

0 闇の名前 ご挨拶にかえて

はじめましての方ははじめまして。

黒木露火くろぎと申します。猫好きの怖くないホラー書きです。

私はこのたび、過去に書いた小説を改稿しようと思いい立ちました。このエッセイは、その試行錯誤の記録になる予定です。

他の小説書きの皆さまの参考になることが何かあるかもということとで、その悶絶模様を晒すことにしました。よろしければご笑覧ください。

黒木露火というPNは数年前から使っていますが、これに決定するまでには紆余曲折ありました。

命名に至るいきさつを、とりあえず自己紹介がわりに聞いていただきます。

そもそもは、ある実話怪談のコンテストに出してみようと思ったのがきっかけです。

そこで、母にペンネームの命名を頼みました。母は以前、印鑑のセールスをしていた関係で、姓名判断ができるのです。

どうせなら画数はいいほうがいいじゃないか、というくらいの軽い気持ちでした。

ところが

命名「美奈月みなつき 青空せいや」

青空だよ！ 晴れ渡ってるよ！

どこの宝塚、もしくは少女小説家だよ！

とおひさまに向かって叫びたくなるほどの爽やかさです。

「あのさ……、実話怪談のコンテストに出すんだから、もうちょっ

と『闇』とか『月』とか『黒』とか、そういうダークなイメージで頼むわ……」

「はいはい。ダークな感じねっ」

母の軽い返事に、多少の不安を感じましたが……。

(再) 命名「黒月^{くろつき} 魔犬^{まけん}」

……人間じゃないデスヨ、ママン。

前々からそういう気はしていたのですが、うちの母は超絶的にセンスが悪い。これじゃギャグにしかならん。

「あのさ……」

「今度はちゃんとダークな感じでしょっ？ 『魔』とか、ご注文の『黒』とか『月』も入ってるしっ」

「それはそうなんだけど、もうちょつと違っやつを……」

言い淀む私を母が遮ります。

「えーっ、めんどくさいっ。あんた、自分で考えなさいよっ。字画はそれそのまま使えばいいはずだからっ。あたしも忙しいのよっ」
これ幸いと辞典と首っぴきでいくつか候補をピックアップし、友人たちに相談した結果、決まったのが現在の「黒木露火」であります。おかげさまで「いいPNですね」と言ってもらえます(たまに)。

ちなみに、ここに挙げたPNの「黒月魔犬」は、「エロエロ18禁ノベルを書くときは是非使いたい」という奇特な方がいらっしやいましたのでお譲りしました。

もしネットのどこかで見かけても、「あ、黒木ってこんなエッチなの書いてるんだ……」と赤面しないでください。断じて当方の作ではありません。

1 未完結作品量産者からの脱却

初心者の例に漏れず、私もやたら長編の構想が浮かび、最初だけ書いて放りっぱなしの未完結作品専門の書き手でした。

それからしばらくのブランクの後、短編を書き始めました。やつと完結作品を書くことができるようになったのです。

短編を書くことによって学べることは多いです。

短編であれ長編であれ、完結させることで上げられる経験値は大きいからです。

それは構成力に関する経験値だと私は考えます。

私は普段はあまりラノベは読まないのですが、何冊かは読みました。

文章は薄いです。どのくらい薄いかというと、通常は文庫本で1時間100ページの読書速度の私が、100ページ30分で読めるつまり、濃度は2分の1（当社比）。描写はかなり足りません。

でも、構成力はあるんです。

その他にも、「池袋ウエストゲートパーク」（1巻）を最近読み返してみました。

ネタといい、ぶつ切れの文章の雰囲気といい、かなり携帯小説っぽいのに、自分が過去に読んでみた携帯小説とはまるで違う。どこが違うんだろぅと考えながら読んでいました。

やっぱり構成がしっかりしているんです。

つまりは、構成力。

プロのプロたる所以はそこなのでしょう。

実際、文章だけが上手いという人は、ネットにはごろごろいますよね。プロになる条件が純粹に文章力だけならば、もっとプロ作家

の人口は多いのではないだろうか。

文章力というのは、技術による部分も多いので、少し注意して書くようにすれば上達します。

しかし、構成力というのは総合的な評価なので、とにかく書き上がってないと、その作品についてきちんと評価することはできません。その評価をふまえて反省することもできません。

構成力は書き上げることによってしか経験値を上げることにはできません。

趣味で書いてるんだから読者なんて関係ないという作者なら、別完結させる必要はありません。自分のためだけに書いてる人には関係のない話です。

ただ、提供されるものが有料であれ無料であれ、大抵の読者は物語の終焉とそれとともにもたらされるカタルシスを求めているのではないのでしょうか。それならば、どんなに途中で面白くても、完結しない作品は読者にとって意味がないのです。

自分もたどってきた道だからこそわかる、やたらと連載が途中で止まる　というより、作品を完結させたことがない人には、氣力的にも技術的にも完結しやすい短編から始めることをお勧めします。

小説書きの世界には、「生まれながらの長編書き」と「それ以外の人々」がいます。

身の回りの前者と思われる人々に聞き取り調査をしたところ、彼らは処女作から脳内プロットだけできっちり完結させることができます。ようです。

もし、初めて書いた（おそらく長編構想の）――二本が完結できない人は、「それ以外」のほうです。どんなに雄大な物語が頭に浮かばうとも、今、それを書くのは止めた方がよいです。間違いなく無理だから。

さあ、同志、「それ以外」の人々よ。
まずは短編から始めよう。

1 未完結作品量産者からの脱却（後書き）

「池袋ウエストゲートパーク」の作者・石田衣良さんはもともとコピーライターなので、ぶつ切れっぽい文章に見えても、ものごとの本質を捉えるような、非常に印象的でセンスのよい言葉遣いをされているということを補足しておきます。

2 そして、落とし穴にはまる

こうして、短編を何本か書いた後、初めての長編を書くことになり 落とし穴にはまりました。

書き始めてしばらくした頃、何かがオカシイということに気づいたのです。

なんだか話が平坦で、盛り上がらないような……？

そこで、知り合いの長編をよく書いてる作者さんたちに相談してみました。

【長編は、起承転結の各エピソードの中に、更に起承転結入れなければいけない】

考えてみれば当たり前のことですから、普段から長編を書いている方は、何を今更とおっしゃるかもしれません。

私は短編をそのまま長く書きさえすれば長編になる、と思い込んでいたのです。

そりゃ、単調な展開にもなりますわいなあ。

作者のテンション、激萎えです。

そんな状況でも、幸いなことになんとか完成にこぎつけることができました。

それは、プロットがあつたからだと思います。

あらかじめ作っておいたプロットに沿って、ただ書き続けることだけに集中して、完結させることができました。プロットがなければ、間違いなく挫折していたことでしょう。

私自身の場合だと、プロットが脳内にある限りは変更がきくと自分自身に甘えてしまい、却って落ち着かず、ふらふら迷った挙げ句に書き続けることができなくなってしまうようです。

一方、根っからの長編書き、生まれつきのストーリーテラーみたいな人は、脳内プロットだけで長編を完結することができます。なんとなくとか無意識で貼っておいた伏線を、物語のラストでまるで手品のようにきっちり回収しやがるんです、やつらは。

その分、無駄になる伏線も多いという本人談もありますが、ともあれ羨ましい才能です。

オンラインで作品を発表している人の作品リストを見回したとき、未完結（放置）作品のほうが目につくということは、そんな風に「生まれながらの長編書き」の能力に恵まれているのは、小説書いてる人たちの中でも多くはないということなのではないでしょうか。

よく、展開に悩んで続きが書けないとおっしゃる作者さんがいらつしゃいますが、そういう方は「生まれながらの長編書き」ではないのでしょーし、最初でプロットを作ってあつたらそういうこともないと思います。

私も、未完結作品を量産していた頃は、プロットは作っていませんでした。脳内プロットで十分だと考えていたからです。今でも、短編を書くときは脳内プロットのみです。脳内プロットで制御できる規模でないと、短編としてはまとまらないようです。

しかし、今回初めて長編を書いてみて、自分には長編を脳内プロットで書き上げることは無理だと悟りました。

並行して走る複数のストーリーライン、伏線の敷設と回収　プロットにこの全てを詳細に書き込むわけではないですが、簡単な箇条書き、あらすじ程度のものであっても、一度脳内から出すことによって落ち着くように思います。

「生まれながらの長編書き」のように曲芸みたいな書き方はできなくても、そういうことができない人間にはできないなりの、魅力的な長編のスタイルがあるはずです。

それは、きつちり練った設定、無駄のないエピソード、物語の終焉に向けて張り巡らされた伏線でかつちりと組み上げられた作品ではないでしょうか。

曲芸は本職に任せて、それができない私たちのような人間は、ひたすら地道に考えていこうではありませんか。

3 ごはんになりたい。(1)

このような経緯で書かれた私の初めての長編「緑の冠」は、色々残念なことになってしまいました。

一年近く経って、どこがまずかったのかも少しずつわかってきたので、改稿しようと思い立ったわけですが、改稿作業に移る前に、まず小説書きとしての自分について棚おろしをしてみたいと思います。

私は、「小説家になろう」ではと断りを入れるまでもなく、ネットの底辺をうろつろしている趣味のオンライン作家の一人です。信者やファンなんていませんし、感想も滅多にももらえません。

マゾい作者なら、「どーせオレの書くものなんかつまんないから感想もらえないんだよ」と自虐プレイに走って快感に打ち震えるのかもしれませんが、「どちらかというとS」「むしろ総攻」などとその手のテストで診断されることの多い私の趣味ではありません。

冷静に判断するなら、思わず感想書きたくなるほど面白いわけでも、ツッコミ入れたくてたまらなくなるほどアレでもない、そういうことなのでしょう。

自分の作品があまり面白くない理由の一つに、「山場が作れない病」が挙げられるかと思っています。ふと気がつくと、患っていたのです。

短編ならヤマ〃オチに見えるのでなんとなくごまかせても、長編はそうはいきません。「緑の冠」ではそれを思い知りました。

この話では、作者想定の子場は二カ所あります。そのうちの後ろのほうの子場が話全体の子場になるはずだったのですが、盛り上げきれませんでした。

読み終えたときの、スコーンと突き抜けるようなカタルシスは、きつちり作ってある山場からこそ、もたらされるのではないでしようか。

今回はそのあたりを考えながら、改稿していききたいと思っています。

さて、欠点だけを取り上げてそれを改善していったら、面白い作品になるのでしょうか。

私はならないと思います。欠点のない作品と面白い作品はイコールではありません。

それでは、面白い作品とはどんなものでしょうか？

いろいろな作品を読んでみたところでは、魅力のある作品です。

欠点は少ないほうが望ましいが、あってもそれが気にならない、そんな魅力のある作品は強いです。さらに言えば、作品の魅力と長所は合致することが多い。

欠点を改善する努力と一緒に、長所を伸ばす工夫も必要だと私は考えます。

作品における長所は、書き手にとっては武器なのです。

自分の武器は何なのか明確に自覚し、意識的に使うことによって、もっと魅力的な作品を書けるようになるのではないでしようか。

4 ごはんになりたい。(2)

それならば、自分の武器ってなんだ？　と考えてはみたものの、わかりませんでした。

というわけで、読み専のリアル友人に聞いてみました。

「誤字脱字とか変な日本語はないよね」

……　ってリア友某よ、それ、長所じゃありませんがな。

誤字脱字は推敲すればほぼ取り除けるし、趣味・読書の人間が日本語おかしかったらただのザル頭でないかい？

「……………他になんかない、かな？」

「ほか？　うーん。あ、最後まで読めるとか？」

最後まで読めるって……　それ、長所かつ？　それになぜ語尾が疑問型？

ありがたくも手厳しい友人の言葉に、私は落ち込みました。

たまにいただく感想でも、同じようなことを言われます。曰く、

「誤字脱字がない」「読みやすい」。

文章だけで書いた人物を特定できるような、特徴的な文章は魅力的だし目立ちます。でも、私が書きたいと思って日々努力しているのは、水のように無味無臭な、これといって特徴のない　つまりは読みやすい文章です。

読みやすく書こうとしているんだから、「読みやすい」と言われるのは当たり前だと思っていました。そして、それは決して武器にはならないのだと。

しかし、誤字脱字がない、読みやすいだけの文章も、立派な武器になりえます。最後まで読んでもらえることができるからです。

作品を最後まで読んでもらうことがいかに難しいかは、自分自身がオンライン小説の読者である方ならわかっていただけたと思います。

誤字脱字が多かったり、文章作法が守られていなかったり、文章

の意味がわかりにくかったり流れが悪かったりする作品は、内容が面白くても読み進めることができないこともあります。

オンライン小説を評価する場合、最後まで読めるか読めないかというのは重要なポイントです。とりあえず最後まで読ませることができるというのは、それなりの武器であると考えてもよいと、現在では思っています。

ただ、贅沢を承知で言わせていただければ、自分の作品は、そうめんみたいだと思っんです。つるつるーっと入って行って、あっさり終わって、後はなにも残らない。

妙に後を引くものよりは、一時的な暇つぶしや気分転換になるようなものを書きたいので、ある意味望んだとおりといえそうです。ですが、そうめんは夏限定ですしね。それに、アレンジがきかないせいぜいにゆめんかソーメンチャンプルくらいですか。

メシツブだったら、年中喰って飽きも来ない。

そうというのが本当は理想です。

白飯、おかゆ、雑炊、炊き込みご飯、すし、きりたんぽ、炒飯、ピラフ、ドリアと、ご飯のほうのアレンジも効きますしね。

そうめんからごはんになれるように、がんばりたいと思います。

6 テーマについて、もう一度考えてみよう(1)

「緑の冠」は、十五年ほど前に元ネタができました。当時考えていたSFのシリーズものの、スピノフという形で、本編の主人公は、作中にちらつと出て来るカラアゲ好きの童顔探偵でした。

設定は作ったものの、本編のネタを考えつかないうちに年月が過ぎ、古くに作った話のため多分に中二病的要素を含んでいて、一生書くことはないだろうなあと思っていたところ、空想科学祭2008に参加させていただくことになりました。

読むほうとしてはSF好きでも、ホラーばかり書いていた私にとって、SFは処女地です。

考証のしっかりしたSFは、付け焼き刃の知識では到底無理。他の方はまともにSFを書く方ばかりだろう。となると、他の人とは違う切り口でいくしかないかもしれません。

ならば、「ハートウォーミングなホームドラマ」で攻めてやろうじゃないの！

ということで昔のネタであるところの「緑の冠」を引っ張り出してきましたが、結局間に合わず、2008年は得意のホラー・テイストのサイバーSF短編「リアルライフ」をアップしました。

こちらにもいろいろと悔いが残る作品なので、そのうちに改稿をと思っています。

「緑の冠」も一応途中まで書きかけていたので諦めきれずにいたところ、空想科学祭2009を開催することと、そちらに投稿するつもりで書きました。

結局、2009年の締切にも間に合わず、選外扱いになったのですがね。スケジュールを甘く見積もったゆえの自業自得です。

なにしろ参加作品数の多かった空想科学祭2009。

ちゃんと締切を守った作品は読めますし、たくさんのレビュー

もつきますが、破つて選外になつた作品はレビューどころか読まれ
もしません。「緑の冠」も例外ではありませんでした。

そんな中でも読んで下さり、感想までくださった方々には、いく
ら感謝しても足りないくらいです。

この場を借りて、お礼申しあげます。

7 テーマについて、もう一度考えてみよう(2)

最初に思いついた十五年前のネタと今回出来上がった「緑の冠」の間には大きな違いがあります。

それはテーマです。

十五年前は「親子（特に父子）関係」がテーマでした。

それも重要なテーマの一つなのですが、今回は、「人はひとりで生きているのではない」ということが一番のテーマになりました。

私の場合は構想時と執筆時でテーマが違っていただけで、執筆時のテーマで書き上げましたが、何年間にも渡って長い物語を書いていると、作者の中でテーマも変わってくることもあるかもしれません。

しかし、同一の物語では、そこはブレないほうがよいことは間違いないでしょう。

逆の考え方をするなら、数年がかりになる作品を書くならば、ブレないものをテーマにもってくる必要もあるのではないだろうか。

「テーマを読者にどう伝えるか」についても、迷うところです。

直球でわかりやすく訴える方法もあれば、わかるかわからないかのさりげなさでテーマが描かれている作品もあります。どちらがより優れているというわけではありませんし、テーマなんだから是非でもわかってもらわなければならないかというと、そういうわけでもないと思います。

年齢や経験によってわかることもあればわからないこともあります。そのときはわからなくても何年も経って「あの話はこういうことだったんだ」とわかることもあり、そういう体験もまた、読み手にとっては貴重なものです。

ただ、読者に理解されなくとも、作者の中でだけはテーマは確固としてあるべきです。テーマのない作品、テーマが作中でころころ

変わる作品は、話がブレるからです。

例えば土の上を歩く動物も、軸である背骨がなければまっすぐ歩くことはできません。

テーマは物語の軸です。軸のない、あるいは歪んだ物語ならば、読者のもとへ届けることは難しくなるでしょう。

ところで、「テーマは一つであるべきだ」という話もあります。それによるならば、「親子関係もテーマの一つ」という私の言い方はおかしいことになります。

確かに一番のテーマは何なのかは一つに絞るべきであるし、そこから話をぶれさせるべきではありませんが、順位を落としたものをサブテーマとして設定することは、話に奥行きを出すためにも良いと私は思います。

ただし、短編ではこれをやると盛り込みきれずに却って散漫になるので、メインテーマを1つ、サブテーマがあつたとしても1つくらいに抑えたほうがよいのではないでしょうか。

8 サブテーマについて語る語る（前書き）

今回は自作語りがメインです。興味のない方はスルーしてください。

8 サブテーマについて語る語る

「緑の冠」でサブテーマとして設定していたのは、まず「父子関係」。

そのために3組の親子を登場させています。

ユージンとクリスという、和解する（疑似）父子。

トーマスと彼の父は、過去の不和を乗り越えて、現在では互いに独立した個人として相手を認め合いつつある父子。

ユージンとその父レットは、永遠に和解することも理解し合うこともないだろう父子。

親子関係で悩んでるお悩み相談なんかで、（立場という意味の）子どもであるところの相談者に「あなたがまず親御さんを許さなければいけません」とか言ってるアドバイザーがいたりしますけれども、私自身はそうは思いません。許せるなら許せばいいし、許せなければ無理して許さなくてもいいのです。まともなカウンセラーならそう言うってくれるんでしょうけどね。

次にクリスと母親エレンの「母子関係」。

ずいぶん一方的にエレンを悪者に書いてしまいましたが、彼女は無知な部分もあつたりしているんなことを諦めていた人で、実際はそれほど酷くもない母親です。子どもを殺したり、放置や暴力で死に至らしめたりしてるわけじゃないですし、クリスもなんだかなだ言って母親のことは好きでした。

母親にももちろん悪い部分はあつたのですが、精神的に少々早熟なクリスは反抗期まっさかりということもあり、「正しくない母親」であるエレンを認められない部分が大きかったというところでしょうか。

そもそも「正しい母親」というのが、所詮子どもの幻想なんですからね。

母親のことを好きなんだけど、それを認められない　そのことを十分に表現できていたとは思えません。ここは改善すべきポイントだと反省しています。

その次に、お互いのことを大切に思っているのに、どこかすれ違っている人たち。

自分では家族になれないからと、ユージンに家族を望むトーマス。トーマスを家族だと言いながらも、他人だから実際は家族ではないし、どんなに大事に思っているとも友人にすぎない彼が、自分の家族を作るためにいつか自分の元から去ってしまうことを淋しく思いつつも、そうなったほうが幸せだからとそれを望むユージン。

ユージンよりトーマスのほうが単純なので、ユージンが彼に直接「君のことは家族だと思っている」って言うてしまえばそれでまとまる話なのに、ユージンはトーマスの父親とも仲が良いこともあって、実際の家族を差し置いてそんなことおこがましくって言えない。あるいはこの二人、恋愛的にくつついちゃったほうがよかったのかもしれないが、それも理由あって無理。

ユージンとトーマスのそれぞれの望みはクリスによって補完されるわけです。

クリスが男の子だったら、真のハッピーエンドは訪れないということ、やはりクリスは女の子でなければいけないのです。

8 サブテーマについて語る語る（後書き）

「緑の冠」の改稿にあたってアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考にさせていただきます。

9 アンビバレンツな反応と感想（1）（前書き）

今回は自作語りがメインです。必要のない方、興味のない方はスルーしてください。

9 アンビバレンツな反応と感想（1）

改稿するにあたって改変すべきか悩んだ点として、主人公の性別の問題があります。

主人公のクリスは男の子のような一人称で服装です。

守ってくれる大人のいない場所で危険を避けるための知恵、という説明を作中ではしています。それとは別に、番外編でクリスの性別を開示して、それまで読者が想定して読んでいたストーリーラインを一部ひっくり返し、クリスの初恋の物語としての構造を改めて浮かび上がらせるという作者の思惑もありました。

番外編で「やられた！」と読者に言わせるために伏線を張り巡らせてあったつもりでしたが、気付いた方は少なかったようです。そのため、読者の中にはこれをアンフェアと感じた方もいらしたらしく、「不愉快」との感想を目にしました。

クリスとユージンでトーマスを取り合うというBL的三角関係を希望して、「番外編のオチはないほうがよい」と言つてのけた友人もいましたが、そういう腐った意見はともかく。

「そもそもクリスが女の子である必要も（読者にとっては）ないし、そのことによって不必要に読者を混乱させるのはよくない」という真面目なご指摘もいただきました。

作者としてはクリスは女の子として造形したつもりでしたが、「クリスは男の子の性格であるから、実は女の子というオチには無理がある」というご意見もありました。

一方、「最初から女の子のつもりで読んでいた」「男の子にしては違和感があると思っていた。女の子だったので納得できた」というご意見もありました。

「緑の冠」はクリスが男の子でも成立しうる話です。

クリスが男の子のような服装や外見をしているのは、生まれ育つ

た治安の悪い街で自分の身を守るためという理由を提示してありますが、改めて考えたら、それが一番の理由ではないような気がしてきました。それで、説得力に欠けてしまったのかもしれない。

身を守るためという実用的な理由の他に、クリスは積極的な意味で男の子になりたかった、というより女の子でいたくなかったのでしょう。

女性として一番身近なモデルとなるはずの母親がどうしようもない女で、そんな風にはなりたくないと思っただけでも、彼女の血をひいている限り、そして生まれ育った街にいる限り、その運命から自分では逃れることができないんじゃないかという恐怖が、主人公にはあります。同時に、自分が男の子だったらもつと母親にも優しくできて、上手くやっていけたんじゃないかという後ろめたさもある。

特に、母親のような、ネガティブな意味で女性的な女にはなりたくないという恐怖は強かったはず。だから、女（の子）らしい服装やふるまいを拒否する。こちらの理由のほうが説得力があるような気がします。

このあたりをもっとちゃんと盛り込めたらよかったかもしれない。

ここも今後の改善点としたいです。

それから前回で述べました通り、クリスが女の子であることによってユージンとトーマスの関係は完全なものになります。クリスが男の子だったらこのように上手くはおさまらないので、やはり女の子で正解なのだと改めて思いました。

9 アンビバレンツな反応と感想（1）（後書き）

「緑の冠」の改稿にあたってアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考にさせていただきます。

10 アンビバレンツな反応と感想（2）（前書き）

今回は自作語りがメインです。必要のない方、興味のない方はとばしてください。

10 アンビバレンツな反応と感想(2)

私はどんでん返しのある話が好きです。

自分自身が思い込みの激しい性質であるため、だからこそかえって、固定観念や思いこみを覆されるような作品が大好きです。

映画や漫画などもそうですが、特に内面を濃く描くことのできる小説は、自分とは違う視点や視野から物事を見たり考えたりするよい(疑似)体験にもなります。

しかし、世の中には自分とはタイプの違う読者も当然存在する。

そのことは頭ではわかっていたつもりでしたが、「不愉快」との感想を目にしたとき、私は動揺してしまいました。誰かを不愉快にさせるために書いた作品ではなかったからです。つまらないとか下手くそとか、そういう感想だったら受けとめられたと思うのですが。つまりは、その読者の方の予定調和的な展開から外れていたゆえの「不愉快」という感想のようなのですが、対する私も、自分の小説の読者の中にもそういうタイプの方がいらっしやるとは思っていません。なかつたゆえの動揺ということになります。要するに、書き手として腹を括りきれなかったということです。

いろいろ考えてみましたが、私はこういう読み手であり、書き手としてもこういうスタイルが好きですし、これからもやっていくと思います。

「アンフェア」の二つ名でしたら、謹んで拝名いたします。

相反する読者の反応として、一部では非常に不評だった番外編の「クリスが実は女の子」というネタが、「クリスが将来トーマスと恋をする」という部分で、一部では非常にウケました。私の知る限りでは、ウケたのはすべて女性の読者です。

昨今はBL流行りなので、クリスが男の子でトーマスとくっつくというネタでもウケたような気はしますが。

いや、むしろそつちのほうがウケたかもしれない。……しまった。

「冗談はそれくらいにして、他の登場人物　トーマスについても、意見がきれいに分かれました。男性と一部の女性からは「ありえない」「嘘っぽい」と不評。残りの女性からはおおむね「癒し系」「優しくて素敵」と好評でした。

「緑の冠」のコンセプトは80～90年代前半あたりの「少女漫画」で、女性をメインの読者ターゲットとして考えていました。なので、トーマスも昔の少女漫画風フェミニスト青年にしています。小学生くらいの女の子が憧れるような王子様タイプといいたまいますか。

だから、男性からみたトーマスの「ありえねー」という感想と、それとは反対に女性に好評だったというのも作者としては納得できます。

ちなみにユージンは、美形だけれども美形らしからぬ性格で、ちょっと不器用だけど実は気のいい普通のあんちゃん。男性からみてもあまり嘘っぽくないように作ったつもりでした。幸い、彼に対しては今のところ特に不評は聞いたことはありません。

ただ、作者としては、最初はトーマスに好感、対照的にユージンには反感をもってもらい、最終的にはユージンに好感をもってもらえるようになれば、と思っていたのですが、トーマスが好きな女性是最初から最後までトーマスが好きで、ユージンが好きな女性も割と最初からユージンが好きだった方が多かったようです。

これはちょっと想定外でした。女心ってわからないものですね……。

10 アンビバレンツな反応と感想(2) (後書き)

「緑の冠」の改稿にあたってアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考にさせていただきます。

11 アンビバレンツな反応と感想(3)

相反する反応や意見、感想などをいただいたとき、作者はどうすればよいのでしょうか？

それらをどう作品に反映させていけばよいのでしょうか？

まずは、自分がどういう読者層を狙っていたのか（性別、年齢など）を再確認するのがよいと思います。

ネットでは年齢性別不詳のこともありますが、できる場合は、その感想をくださった方が、どういう年齢・性別の層にあてはまるかを考えます。テレビの視聴者を年齢性別で分けるF1とかM1ありますが、そういう感じで。

それは、その方が自分の想定した読者層から外れていたら、参考にしないというわけではありません。その層の読者はどういうことにどういう反応をするのか参考にするのです。わからない場合は、文章、語り口から推測し分析する。

これも、立派な創作修行ではないでしょうか。

世の中には、いわゆる荒らし的な感想を残す人もいますね。

最初そういう書き込みを見たときは、落ち込んだり、腹立たしく思えたりするかもしれませんが。

そういう人もじっくり分析させていただきましょう。

なぜそんな行動をとるのか、どんな人格なのか、知識レベルはどの程度なのか。

それを自分の創作活動に生かしましょう。

余談ですが、嫌なこと悲しいこと辛いことがあったときには「ネタになる」。その程度がひどければひどいほど「これはネタになる」。こういう発想の転換で人生の困難を乗り越えていきたいものです。

話が逸れてしまいましたが、自分の書くものに対して、読む人がどんなことを感じるか、考えるか。ある程度の予測をもって執筆にはあたることは、必要だと思います。

そうでなければ、読者の反応を見越してストーリーを展開し、伏線を張り巡らせることは難しくなるからです。

同時に、どういう年齢や性別の人がどんなときにどんな反応をするか洞察した結果は、キャラクタ造形として作品にも生かせますし、それによってリアリティも出るのではないでしょうか。

あるいは、女性向けの作品だからといって、登場人物のすべてが女性にしか共感されないタイプというのももつたいない話です。

譲れない場合を除いては、読んだ男性読者から「こいつは友だちにしたい」とか「この子は彼女にしたい」と思えるようなキャラを出す、作品自体も幅が広がり、面白くなるのではないかと思います。

次によりよい作品を作るためにも、いただいた感想にはじっくり目を通し、自作と読者の分析に励んでいきたいですね。

11 アンビバレンツな反応と感想(3)(後書き)

参考サイト: Quick Order「テレビ業界専門用語辞典」
より転載

<http://www.quickorder.jp/yogojiten/>

F1 視聴率の集計区分の一つ。女性の20歳から34歳。男性の同年齢層は「M1」。

F2 視聴率の集計区分の一つ。女性の35歳から49歳。男性の同年齢層は「M2」。

F3 視聴率の集計区分の一つ。女性の50歳以上。男性の同年齢層は「M3」。

ちなみに、それ以外は「ティーン層」になるそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6455m/>

ぜんぶネタバレ

2010年10月8日14時28分発行